

平成 25 年度高松赤十字病院医学会

日 時 平成 25 年 10 月 26 日 (土) 13 時~17 時

場 所 高松赤十字病院 大会議室

教育セミナー

「皮膚寄生虫妄想の診断と治療」

高松赤十字病院 皮膚科部長

池田 政身 先生

皮膚寄生虫妄想とは、皮膚を虫が這ったり、刺したりするような妄想を訴えるが、他の人格障害を認めないものをいい、かなり稀な疾患であるが、当科には多くの症例が受診している。虫を殺す治療を求め皮膚科を受診するが、精神科受診を

拒否する。抗精神病薬内服が必要であるが、しばしば内服も拒否し、治療に難渋する。今年の日本皮膚科学会総会での教育講演をもとにこの疾患の診断と治療につき概説する。

一般演題

(1) 2型糖尿病を発症したダウン症患者へのインスリン導入

本9看護室¹⁾ 南6看護室²⁾ 薬剤部³⁾
 栄養課⁴⁾ 内分泌代謝科⁵⁾

○馬場里美¹⁾, 渡辺晴奈¹⁾, 岡田留理²⁾
 住吉加奈³⁾, 高本亜弥⁴⁾, 佐用義孝⁵⁾

2型糖尿病を発症したダウン症患者(30代男性)に対し、インスリン療法を導入したので報告する。不規則な食事のため、記録票を作成し、血糖値、インスリン注射、食事量の関係を確認した。また、小児科医と合同カンファレンスを実施し、早期退院を目指し、両親への指導を計画した。両親は協力的で、入院15日目に退院となった。退院前に持効型インスリンとBOTに変更し、外来で指導を継続し、血糖コントロールは良好となった。

(2) 糖尿病透析予防指導開始後1年の報告

糖尿病透析予防チーム

栄養課¹⁾ 看護部²⁾ 内分泌代謝科³⁾

○高本亜弥¹⁾, 増岡美佳¹⁾, 横山知子²⁾
 好井由紀子²⁾, 高橋人己²⁾, 岡部満寿子²⁾
 杉本正子²⁾, 馬場里美²⁾, 石河珠代³⁾, 佐用義孝³⁾

平成24年の診療報酬改定で、糖尿病透析予防指導料(350点)が新設された。現在は医師2名、看護師6名、管理栄養士2名の透析予防診療チームが指導を行っている。合併症予防における患者指導は、各職種がそれぞれ専門的にアプローチしても思うように行動変容につながらないケースもある。チーム医療による、より効果的な合併症の重症化予防指導を検討することを目的にこの1年間を振り返ったので報告する。

(3) 当院におけるストーマ周囲静脈瘤の発生状況について

看護部

○山本由利子

ストーマ周囲静脈瘤は頻度の少ない合併症だが、多量の出血をきたすため予防的ケアが必要である。今回、当院での発生状況について調査した。

過去6年間に当院で結腸ストーマ造設を行い3か月以上経過観察した122名を対象とした。肝病変のある患者22名のうち9名にストーマ周囲静脈瘤を認めた。肝病変のない患者の静脈瘤発生はなかった。術後から静脈瘤の発現月数は平均15.1か月だった。症例を提示し経過を述べる。

(4) 当院における血液培養提出状況について

検査部

○松田明日香, 筒井恵美子, 渡辺典子, 安西邦男

血液培養検査は感染症診療において重要な検査の一つである。血液培養検査の積極的な施行や、複数回の検体提出が起因菌の検出率向上のため推奨されている。今回、当院における血液培養の提出状況や陽性率、検出菌について検討したので報告する。

(5) 経管経腸栄養開始後の難治性下痢患者に対するNST介入

栄養課¹⁾ NST²⁾ 消化器科³⁾

○安田 泉¹⁾, 太田麻里子¹⁾, 黒川千尋¹⁾
 増岡美佳¹⁾, 碓石峰子¹⁾, 高本亜弥¹⁾
 黒川有美子¹⁾, 西原麻美²⁾, 高坂知子²⁾
 中條里咲²⁾, 空保真奈美²⁾, 野村容子²⁾
 三谷 隆²⁾, 宮脇綾子²⁾, 細川悦子²⁾
 六車博昭²⁾, 三浦一真²⁾, 荒澤壮一³⁾, 出田雅子³⁾

経口摂取困難な患者に対する栄養療法では、第一に経管経腸栄養法がすすめられている。

しかし、合併症として、下痢の出現がもっとも多く見られ、原因や患者背景に応じた対策が必要となる。今回、誤嚥性肺炎から経口摂取困難となり、経管経腸栄養を開始するも、難治性下痢をきたし、Nutrition Support Team (NST) 紹介となっ

た症例への取り組みについてまとめるとともに、今後の活動の課題について検討したので報告する。

(6) 初産年齢と帝王切開率について

産婦人科

○後藤真樹, 高倉賢人, 小林史昌
 松原慕慶, 森 陽子, 神余泰宏, 野々垣多加史

2001年から2012年の12年間に当院で分娩した全初産婦7091症例について年齢と帝王切開率(帝切率)について検討した。結果として、加齢とともに帝切率が上昇する傾向を認めた。年別初産婦帝切率の検討では、初産婦帝切率ならびに高年初産婦頻度の上昇傾向が認められた。初産年齢の引き下げが必要であり、そのためには一般の方への初産年齢とハイリスク妊娠の関係についての情報提供が急務であると考えられた。

(7) 当院でのエソメプラゾールを用いたヘリコバクター・ピロリ除菌療法の検討

消化器科

○野田晃世

【目的】新規プロトンポンプ阻害薬(PPI)であるエソメプラゾール(EPZ)を用いたヘリコバクター・ピロリ除菌療法の効果と安全性を検討する。

【方法】EPZを含む3剤併用除菌療法を行った症例につき、除菌率、副作用の頻度等について検討する。

【成績】1次除菌は除菌率77.1%、2次除菌は除菌率96.7%であった。

【考察】EPZを含む3剤併用療法でも従来の薬剤と比較して遜色ない除菌成績が得られ、安全に施行しうると考えられた。

(8) 高松赤十字病院における周術期口腔機能管理の実際

歯科口腔外科

○妹尾昌紀, 米本嘉憲

近年、がん患者などの全身麻酔手術に際し、歯科において手術前後に口腔機能管理を行うことで

術後性肺炎などの術後合併症を予防することが期待されている。平成 24 年度の歯科診療報酬改定で周術期口腔機能管理料が新設されたこともあり、当院でも周術期口腔機能管理に積極的に取り組んでいる。今回、院内における連携をより充実することを目的とし、当院における周術期口腔機能管理の実際について報告する。

(9) 当院におけるロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術の経験

泌尿器科

○泉 和良, 川西泰夫, 山中正人
森 英恭, 山本洋之, 富田諒太郎

当院において 2013 年 7 月よりロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術が開始されました。ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術は腹腔鏡下前立腺全摘除術の発展型として位置づけられております。アメリカでは従来の腹腔鏡下前立腺全摘除術はすでにほぼ完全にロボット支援手術に置き換わっているようです。ロボット支援前立腺癌手術では 3D 画像を見ながら、リモートコントロールによる鉗子操作が行われます。鉗子は術者の操作により動きますが、体内内での鉗子の動きは術者の操作そのものではなく、コンピュータ制御によって質の高い手術が可能のように調整されています。

(10) 原因の異なる急性胃腸炎による MERS の 2 例

小児科

○福留啓祐, 古本哲朗, 市原裕子
清水真樹, 市原朋子, 藤井笑子
坂口善市, 幸山洋子, 大原克明

小児の急性脳炎・脳症は緊急疾患の 1 つであり、早期診断・早期治療が重要である。その中で、頭部 MRI で可逆性脳梁膨大部病変を有する脳炎・脳症は clinically mild encephalitis/encephalopathy with a reversible splenial lesion (MERS) と呼ばれる。

我々はサルモネラとロタウイルスという、原因の異なる急性胃腸炎による 2 例の MERS を経験したので報告する。

(11) がん化学療法が「確実」「安全」「安楽」に行なわれるための外来化学療法室での取り組み

外来化学療法室

○戸井恭子, 徳田礼子, 糸瀬由美子
岡野愛子, 和泉洋一郎

平成 24 年度の外来化学療法の治療件数は月平均 286 件であり、その件数は年々増加してきている。また、抗がん剤開発や治療の進歩もめざましい。そのような状況の中、看護スタッフはがん化学療法看護認定看護師、緩和ケア認定看護師、本 5 病棟看護師の日替わり看護師 3 名で勤務している。スタッフのがん化学療法に関する知識の程度は様々であり、患者が確実・安全・安楽に治療が継続できることを最優先に看護を行なっている。

(12) がん化学療法における薬剤師のかかわり

薬剤部

○奥野義規

薬剤部では、がん化学療法を受ける外来・入院患者に対し患者指導、安全管理、さらにスタッフへの情報提供を行っている。抗がん剤はすべて安全キャビネットで無菌調製を行い、患者毎のケモカレンダーを使用し、投与量・休薬期間等の確認を投与前日までにすべての患者に実施している。多くの抗がん剤は、安全域が狭く投与量の間違いは、致命的になる。そこで今回、薬剤師がどのようにがん化学療法に関わっているのか報告する。

(13) 当院緩和ケアチームにおける現状と課題

がん患者サポートチーム（緩和ケアチーム）

○酒井智子, 渡邊美奈, 松永晴美
木村友美, 高本亜弥, 多田奈津美
中尾 都, 島津昌代, 林 章人, 吉澤 潔

当院では、2006 年 10 月からコンサルテーション型緩和ケアチームを立ち上げ活動しており、年間平均 70 件の新規依頼がある。今回、活動開始から 6 年を経過したことから、緩和ケアチームの活動についての現状把握と今後の課題を明確にするために、当院に勤務する医師、看護師をはじめとする医療職に対し、緩和ケアチームの活動に対

するアンケート調査を実施した。その結果、今後の課題としての取り組みの示唆を得たので報告する。

(14) 当院院内トリアージの現状と課題

東1看護室

○蓮井和子, 奥村江里子, 宮瀬貴子

平成24年の診療報酬改定で、救急領域では院内トリアージ実施料が算定できるようになった。当院救急外来でも同年5月より、院内トリアージを開始している。

救急外来を受診する Walk in 患者は1ヶ月平均540人で、その内トリアージ実施料が算定されているのは230件程度である。また、トリアージした全症例に対して、JTASを用いて、アンダートリアージの有無など事後検証を行い、看護師のトリアージ能力の向上に努めている。

1年が経過した今、院内トリアージの現状と今後の課題について報告する。

(15) 南4看護室における内服薬に関する事故防止対策の現状

—配薬カートを導入して—

南4看護室

○藤井美幸

南4看護室では、平成24年10月から配薬カートを導入した。病棟薬剤師との協働を深めることで、医師を始めとした医療チーム内での内服薬に関連した業務はこれまで以上にスムーズな流れになった。結果としてヒヤリハット件数の減少につながることができたので、その現状について報告する。

(16) 全自動免疫染色装置導入の効果と課題

病理科部¹⁾ 検査部²⁾

○細包郁美¹⁾, 岡坂奈緒子¹⁾, 筒井真人¹⁾

手島由理¹⁾, 高田暖子¹⁾, 長町健一¹⁾

荻野哲朗¹⁾, 嶋田俊秀²⁾

今日の病理診断において、免疫組織化学（免疫染色）は欠かすことができないものである。当院

では2012年の一年間に、518症例、3811枚の免疫染色が行われた。これまで免疫染色は全て外注検査であったが、本年5月より全自動免疫染色装置（ロシュ・ダイアグノスティックス社製 ベンタナ XT システム ベンチマーク）を導入し、使用頻度の高い31抗体において院内で染色を行っている。その使用経験と現状、院内検査導入の効果、今後の課題について述べる。

(17) 東6病棟リハビリテーションの取り組み ～退院時指導の実際～

リハビリテーション科

○白井秀和, 諏訪 勉, 石原恵美

東6病棟は亜急性期病棟であるが、今年1月より、急性期病床11床を加え計40床となり、整形外科、脳外科等急性期治療を経過したさまざまな診療科の患者様が入院している。リハビリでは、主に在宅復帰支援を目的とし、患者・家族のニーズを取り入れ、看護師・MSWなど他職種でチームアプローチを行っている。そこで今回は、人工股関節置換術後の患者様を症例として実際に行っている退院時指導について報告する。

(18) 心臓カテーテル業務における臨床工学技士の役割

医療機器管理課

○豊島好美, 山田和典, 高畑卓弥

土手添勇太, 高木裕架, 相原輝乃

峠 明香, 井上一也, 田井裕也

別府政則, 森長慎治, 光家 努

松本浩伸, 赤木百合子

2012年4月から看護師不足・夜間緊急対応のため心臓カテーテル業務に臨床工学技士が立ち会うようになり一年が経過したので、一年間の業務を報告する。昨年の補助循環装置稼働件数はIABP24件、PCPS7件と増加傾向であった。来年度の中央棟への稼働に伴い、今後も緊急症例に対し迅速に対応出来るように努めていきたい。

(19) 3DWS 関連業務の現状と今後の課題

放射線科部

○安部一成, 中川真吾, 須和大輔

当院のCT装置は、平成9年にシングルヘリカルCTの導入とともに2台体制になり、その後何度かの更新を経て現在の16列ヘリカルCT及び64列ヘリカルCTの構成での運用に至っている。その間、装置の性能も飛躍的に向上し、3Dワークステーション（以下3DWS）も導入され、検査数の増加はもとより、WSを使用した3D画像構築や各種解析業務も増加している。これら3DWS関連業務の増加は本来のCT装置での撮影業務に影響を及ぼすことも珍しくない。また、今後さらに3DWS関連業務は増加することが予想され、今後の対応について十分検討を行う必要がある。

今回、3DWS関連業務の現状と今後の課題について報告する。